書評

開発における「善玉（ヒーロー）」と「悪玉（ヴィレーン）」

浅沼信爾
一橋大学客員教授

William Easterly, 2013, *The Tyranny of Experts: Economists, Dictators, and the Forgotten Rights of the Poor*, New York: Basic Books

イースタリーは、元世界銀行の研究調査部門のエコノミストで、現在はニューヨーク大学の経済学教授、同時に同大学の開発研究所(Development Research Institute)の共同所長（Co-Director）。関係者の間で好評を博した *The Elusive Quest for Growth: Economists' Adventures and Misadventures in the Tropics*, Cambridge: The MIT Press, 2001（ウイリアム・イースタリー著、小浜裕久、織井啓介、冨田陽子訳、『エコノミスト　南の貧困と闘う』、東洋経済新報社、2003 年）と *The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done So Much Ill and So Little Good*, New York: The Penguin Press, 2006（ウイリアム・イースタリー著、小浜裕久、織井啓介、冨田陽子訳、『傲慢な援助』、2009 年、東洋経済新報社）という開発援助についての著書を出版している。

これは彼の３部作を通じて言えることだが、テーマは途上国経済の開発ではなく、途上国経済開発に対する先進国の人々―世界銀行のような国際機関を始め、バイの援助機関、開発経済学者等のエコノミスト、等々―のいわゆる開発援助についての論考だ。言うまでもなく、途上国経済開発の主役は、途上国の政府であり、政治指導者であり、ポリシーメーカーとしてのテクノクラートであり、何よりも途上国の農民、企業家、家計を預かる人たちだ。だから、イースタリーの論考は、背景あるいは映画に例えると助演者の演技評価ということになる。そして、３部作の副題に簡潔に表現されているように、助演者たちは皆大根役者で、途上国の「開発という芝居」を台無しにしている。むしろ、害あって益なしというのが、彼の評価だ。わたくしにとっては、イースタリーの眼が助演男優や助演女優に向いているのは、ちょっと不満だ。もっと主演俳優を見て、評価して欲しい、と思う。

イースタリーは、彼の主張を読者に分かり易くするために、議論をハリウッドのマンガ映画的に仕立てている。映画では、ゴッサム・シティーというオドロオドロシイ町があって、その町の支配を企むジョーカーと称する「悪玉」が居て、それに対抗する「善玉」にはバットマンがいる。装置や配役は素晴らしいが、物語は単純な、ハリウッド的勧善懲悪の話だ。それでは、本書の「悪玉」は誰かというと、開発に対する「テクノクラティック・アプローチ」だ。開発

独裁で経済成長を追求してきた専制的な政治指導者―アジアでは、リー・クアンユー、パク・チョンヒー、スハルト、マハティール、それに鄧小平、アフリカではエチオピアのメレス、ラテンアメリカではピノチェット―とそれを支えるポリシーメーカー達と外から開発を援助する人たちが開発目的のためにとる手法で、「富国」を究極的な目的にして、歴史を無視し、あたかもリセットボタンを押すような認識で、国家やその経済を、上から目線で（リ）デザインしようとする。そのような国民不在のアプローチ自体が、結局経済発展と貧困削減を抑圧するのだ、というのがイースタリーの主張だ。

悪玉の思想的な代表者は、スェーデンの経済学者で『アジアのドラマ』と題する大著を表し、ノーベル経済学賞を受賞したミュルダールだ。[1] 脇役も華やかだ。帝国主義・植民地主義時代に活躍したイギリスの植民地官僚を始め、世界銀行や UNDP、最近ではビル・ゲイツも悪玉の仲間になっている。では他方の善玉はだれか。善玉グループで、ミュルダールに対峙するのは、ハイエクで、彼もまたノーベル経済学賞の受賞者だ。オーストリアの経済学者で、全体主義的な国家統治や経済運営に対する反対論を『隷従への道』という有名な著書で展開した、自由主義的哲学の論客だ。[2]　悪玉グループの脇役のように、魅力的で、華やかな脇役は多くないが、それでもアダム・スミスや中世の都市国家ジェノア、「現代自動車」、等々が顔を出す。

さらに、ニューヨーク・マンハッタンの南端に近いソーホー地区のグリーン街の歴史も重要な脇役だ。もともと解放奴隷の住宅地だったグリーン街地区は、いくつもの変遷を経て今日の美しい、豊かな街になったが、その変遷はアメリカの自由主義的な発展をなどっている。経済発展と貧困削減は、しょせん個人の問題で、従来の開発経済学は個人の自由、尊厳と権利を脇に置き忘れてきた。上から目線のソシアル・エンジニアリングではなく、個人の権利を保障してやりさえすれば、経済は自然発生的に発展する。人々は貧困等の問題に対する解決策を自力で見出す能力がある。これがイースタリーの善玉の主張で、彼の従来からの主張である経済の構成員に対するインセンティブが最も大切だという主張を、一歩進めて個人の権利を前面に押し出している。そして、その文脈から、「自由な市場」とか「自由な開発」のイメージが提示される。このようなアプローチは、本書では「権利アプローチ」と名付けられている。

---

[1] Myrdal, Gunnar, *Asian Drama: An Inquiry into the Poverty of Nations*, in 3 volumes, New York: Pantheon Books, 1968.　G.　ミュルダール著、S.　キング編、板垣与一監訳、小浪充、木村修三訳、『アジアのドラマ：諸国民の貧困の一研究』（上・下）、1974、東洋経済新報社。原著の全訳ではない。

[2] F.A. Hayek, The Road to Serfdom, London: G. Routledge and Sons, 1946. フリードリヒ・A・ハイエク著、一谷藤一郎、一谷映理子訳、『隷従への道：全体主義と自由』（改版）、1993 年、東京創元社。

悪玉と善玉の闘いは、イースタリーの脚本では、驚くべき結末を迎える。自由な市場、自由な社会、民主的な政治を特徴とする世界では、国家や国境はたいして重要ではなく、政治指導者のリーダーシップやテクノクラートが策定する政策も経済発展と貧困削減には大した影響を与えない。むしろ、国家や政治指導者やエリート・テクノクラートは、個人の自由と権利を保障するよりも抑圧する傾向が強いから、個人が自力で解決策を見出す妨げになる。これが、イースタリーのハリウッド・マンガ的映画の大団円だ。この大団円を観終ったあとで、皆さんは、「世の中そんなに単純明快だったら、苦労しないよね」と言い交しながら映画館を後にするのはないだろうか。

このような書評を、SRID ジャーナルという仲間内の小紙に、日本語で―すなわち彼の目に触れない形で―こんな調子で書くのはちょっとためらわれる。オチョクッテいるのか、と思われるかもしれないからだ。しかし、本書におけるイースタリー本人の悪玉グループに属する人たちに対する批判は、舌鋒鋭く、悪口雑言の限りを尽くしている。そこで、この書評もそのトーンを借りたものになってしまった。いつか機会があったら直接本人に会って、これと同じことを言うつもりということで、許してほしい。また、この書評のトーンが正しいかどうかは、皆さんが本書を読んで判断してほしい。イースタリーの友人で、彼の著書が出るたびに翻訳の労をとってきた小浜裕久静岡県立大学名誉教授が、本書の訳書を近日出版されるそうだから。